甲冑出板第一　共九八

共十三

猿蓑祇　二十八完

ル 4
375
12

八尋七兵衛
藏書

東京都立
學校圖書

門 儿呂4
號 375
卷 12

筑前國續風土記巻之二十八

土産考下目録

百穀類　菜蔬類　藥品類　果蓏類
衆草類　諸竹類　群花類　海藻類
樹木類　草栁類

筑前國續風土記巻之二十八

土產考下

百穀類

穀　筑紫米　米ハ[illegible]名產ニシテ領中肥後筑前の米と佳品ニシテ領ニシテ秀酒ヲ醸シテ味あり國中最上產秋須と佳品ニシテ元福の品新多し名名あり　あらてかすへ　かすへ　早米　志摩郡波多江村ニ毎年六月ニ新米と國君ニ献ス　長政公ニシテ福岡の城ニ築ク時波多江村の山伏一人土切ニ勤ム　長政公是を惠ミ三年山伏ニ[illegible]ことを感シテ米を[illegible]ク出し

毛と称して其後年々例として彼山伏の子孫今に
至る米と稗と粟と植る田地を宅中に腐月或は
四月に初て稗を植すきび尾と云稗なり　国君
毛と感賞して毎年米を獻ずる
赤米　大唐米と云土民ども甚うやまふ米の色赤し
味あしくとくも性よく癒澤ある病人に用いてよし
又ひらしとす酒にくへハ印を捺へ動を
十年　二十年も久しきを埋置て存す民用に利あり
粟　大小黍数多し　上方部に多く似る
占城米　陸田に稗に似て大なり
蠶豆　日陰本より下田沓ある郷にもちらし栽る

して結実のる大和豆と称して植て第一なり
人に食す飢を助く民用に利あり
眉児豆　扁豆の類多しさやにして食す毛年実
ものなる
香稻　二種あり味美香
稽豆　黑豆多しいたるあり
豌豆　地豆蔓にして圃に植る
あり又毛年かんきん大角豆
あり赤白赤二種あり
多平にして一年に二度実のる
糸稷　蜀黍　玉蜀黍　深　孫子　胡麻白黑　大豆
黑大豆　赤小豆　大麦　小麦　扁豆　刀豆　蕎豆

白豆　蕭豆　蕎麥（ホアリ）

牛蒡　土佐郡長岡郡井野瀬村を始め所々に

藤波　小豆島に多く出る世俗語りて何首烏と

苔蕪　蕪菁と同じく高知に世俗語りて何首烏と

称す非なり

油菜　国中所々に多く植ゆ就中上佐郡下佐郡

に多し其葉とりて高菜の如し惟多の所にて

油を搾り又大根の代せに多く植ゆ

菘　京菜と同じ甚新多し

蘿蔔　大根の新多し三月大根稿大根古呉根

小大根　赤大根等

水蘿蔔　平京の圃により移植す高多し其乃

ち味噌漬にして根と皮付莖と成して食す大根

より味美し辛し

芹　所々に多し能井志摩郡　楊井村の産味

最美し

茗荷　京菜と同じく別種にして居り茗荷甚大に

して多し

壺盧　夕新に所々に百年の古木多し夕顔

に似て多く京にて又苦瓢に食すること

蕎麥　山中所々に多し枯月代山に出るもの丈長

く大なり味美し山菜と云ふ幾内江戸に圃に作る

山とろろと自然生とふの苗賞翫すべくね芋うちい
もろこいもの名合して味ひ一圃に植べし
胡荽　臭氣一種も強き物なれども食用ゆ八月に生ず
草石蠶　日蔭又本のもの強盤品す食べし又
俗に助く甘藷なれども名付毒なし
葱　冬とききのうきハひともなるなり又云ふ
其新芽大葱を少葱をかきとけきと又あさつ
きなり
南瓜　九月に成りて熟するときハ味あしく老るが
如き毒ありて用ひ難し性寒味甘猪肉と

同じく食べしと書り元へ人好んで食すとあり
昔は日本にはなし寛永の初めなりと又品
々新あり昔は南瓜の新しき
藤　つるを味噌にて菜とす
地膚　二種ある枝ちきと苗とす枝ちき
食すべし苗を枝ちき苗とす苗を苗として
田平子　毒月水田の中に生ずるなり
俗にませと食す味よし
蓼　大小二種ある大にして苗ちくやうハ蓼蓼といふ
蓼ちくなり
芹　俗に小蓼と温となし山圃に多く植く飢を助く

民用に利あり

白芋　其莖白く大にして其根も甚だ美味市に多くうる食すべし味淡泊にして食べ

赤芋　形ちくさに其莖あるく大に食すること白芋市に多くうる

大芋　上総邦にうる出る甚大なり味又よし

栗芋　こまかに蓮華のごとし其根のかたち栗に似うる味と赤栗に似たりて美なり生にて食べも良くゆでて山中にうる

番椒　甚だ辛味多し故に毒にして食べ

宿食を消胃口をひらき魚毒を化し心腹の痛を

ゆ下血を治し冷痰結癖をやわらげ切なり活血

ゆるべし時珍食物本草蘆生八牋唐詩書譜に

苟蒿　菜として食す味ほく性と赤しく苦又えつ

へし

土蘭児　蔓なりて三葉ありて山中にうる根圓にして

綿のごとく多くつきたり一根を切りて五寸と為して

数彩をとる日にして美なり民俗芋といひ以て

蒐　白蒐と赤蒐あり共に根を白蒐を上品と

す早蔵に貯ます

木天蓼　所々深山に多し其実の形ちゆがみ

ちゝろを平〻く一ツを長

萵苣　白萵あり赤萵苣あり長苣あり白して
葉大なるを五六月まて久敷栄あるを味ひす
獨活　ホゝ山中に生す秋月に生るものを英大なり
又ほそく食すを根をあへものにして味す俗に榜根と
云ふ芽〻芽〻を狗活と云長〻なるを俗に玉ノ子と
皮をとりてあへものに用ひて食ス
蕨　国中所〻の山に生ス子を弱緋と称す多し
秋頃発枝月村に出るものを味ひ多し四年
〻を根をとり粉をとりて食すあつ毒民を害ス
出つ山中に仙人掌と称す一月をうやゝ苟根とほり

餅〻にして食し飢を助く又糊〻して紙をとるなり
薇　深山幽谷の所〻に多く出て甚大に芒を
味苦し煮て食す味美し又ほして食す荘子及朱子
の詩傳に出るなり和名を之
絲瓜　ひるを時菜にす老るハ浴中にす性を示
あしゝ
鶏腸子　毒用出つ菜にすべし
苦菜　冬毒生長ス菜にすべし蕪の如く食
する人稀なり月令に記す苦菜を
薤　甜菜　藜　蘋　繁縷　菠薐　蒲公英　莧　馬
歯莧　慈姑　水萵苣　竹筍　萍蓬艸

藥品類

鶴虱　天名精とも云葉ハ腫物を治し折傷をやし
妙薬なり又知て垂へし野にも多きものなり
たゝこの葉なり洲なり云実を咲し
紅花　上産丹産勝れ園あり多く作りて利とし
茎しゝ紅しぼり染し其苗のゆゑ付合す実ハ油す
其用多し
茯苓　所々山中にあり松月のおく江川に多し白茯苓
紅白多し紅花すくなし
蓮　所々池に多く植ハ民用に利あり根とゝ
茎とゝ実とゝ用ゆ淤泥をいむ蓮肉とゝ蓮茎と
用ゆ
芡実　所々の池に生す鈴鹿郡本村の池に多
し鬼蓮と云実を茎に用ゆ又粉として食す其
実代苞汁形詩に洲なり所々にあり詩注実と云
沙参　所々に多し葉ハ杏葉又桔梗に洲なり俗に
ゝさゝと云ゝ葉ハ小にしてすのめし延喜式太宰府の貢
物に人参と載せり然も今に人参也し凡延喜式に
記す所の貢茎ハ多くハ和名抄に人参と云る
に沙参なりしかるに本草に拠て張源古に沙参と以て
人参に加へ用る誤新本草に錯列人参とあるハ沙参
なり是中華も沙参と人参と採に独ハ延喜式に

載る所の人参八條の内参あるべきなり凡日本にて人参を
用ゆるこの多し内参羊乳根の外さいまも宜しからず不
可用如し人参と云ふものは国々にて多し味苦にて
性あしく至って用ゆる所を上方にてやはり人参と云ふものなり
壱貫郡白崎にもあり本防風也人参として用ゆるなり
羊乳根　是も内参外形にて性中同し人参と可用
用ゆるしにくの山中にて夢人参と云其家内参なり
大にして殆ども如なり故又ひろう人参ともいふ左草
綱目内参代参にて人参にて其つる紫多にして三葉にて
三葉にて人の手まさされども其香形もとし恰土瓜
瑞相の山にて産するは其根九

薏苡仁　茨にし食にして又大なるを茨と云
常山　左字と考ふるに二種あり一種をくさきと云
樹なり三葉にて織民是をあつものとしあへ物
として食す性あしく一種は茨代是を河内小木
喉し形形紅色村にて多し
前胡　茎と枝にて野にあり
龍膽草　所々山野にあり葉もとつへしてんとうと
云
臺牛子　花青白赤紺色にて其実玉白あり茨と
又油にて
蔓荊子　所々海辺に多し竹間つくまと云

海金沙　村野に多し　蔓草に
天南星　二種あり　共に用ゆ　冬葵の下の根とる
毒あり　林中に生ず
萆麻子　薬にし油にして民用に益あり　毒あり
括楼　根を掘り茎に用ゆ　実は切りて酒漬にして瓜
のごとしこれを括楼仁と云　根をとりきりて汁にして天
花粉にして饌に食す　錢謹と称す　又牛蒡とも云
この根を根とす　この括楼仁に対する性悪し　五月食
狗把　唐に出ず　二種あり　唐にも味甘し
五加木　根と茎に五加皮と云　これを合す　苦し　性温
又味甘きもあり　五加皮酒中風に宜し

冬葵　小あり　これを云　其子を茎に用ゆ　茎をかりに
又根あり　これを茎根と云　多和苦　これを花し
艾葉　所々田野に多し　能中竈門に焚くべし
これ伊吹山の産を沙汰す　長大にして艾をつくるに
原とすと　医書に云　三月三日五月五
日に取べし
流字多　蛮名あり　南蠻外夷ぬんて用ゆ　近年
はじめ所々に植ゆ　これを麻と沙汰す　秀実を蓖麻荷
又宿根より生じ茎と葉と
こうこうに付る　いまだ三月にして
実　長さ七寸ばかりなる二種を大なる茎に用ゆ　熟し

うゑて日に紙にして後ひすくし後ふる時に
日にけすくし紙にうるはは生食の熟せざるハ性あしく
銀杏　上産形にあり雄木にハ実なりハ三角なる実を
植るに雄木にあらうへからず
柿　つきの新あり　あまきを甘柿と云　砂土に宜かるべし
赤土に形小なり　秋月山中に
寿する木にあり其味幾回代寿にさり柿なり
多し
梨　其京多し　清梨　雪梨あり山中に宜し
うすく甘長形にして村神社に村にうる梨に実は
ゆへに其梨の名も神社にちなみ称し上京に

大栗　にあり赤土に宜し砂地に宜かるべし
抗栗　さく栗又ちく栗と云小栗と山野に多し実
民生に用ひて飯に加へて食或助く事初山野を焼附
て栗にうへ蒔てやがて成生し蒔に植この毎
年ひらく
懸鉤子　山中にあり多し四月に実のる山人持来り
多くうる
虎杖草　ちくさいまてハくるんすいちにふ実大
くして甚甘
蓬蘭　色いちにふ蓬たなり
蕁田麻　田野にあり四月頃のちこのる性かるべ

尚ぬんて食す

唐苺　葉と実も大に味よし実代交ぜて園春に植て山野に出し実邦に多きを代用きるべし

楊梅　国中に多し極谷郡左谷村の枝村梅ノ浦に多ぬ一株大木に其木枯なれども一丈ばかり四方に枝株に其実代大なる事梅の如し味酸甘美なり

榅桲　実は梨代に酸し花色白

椎　所々の山に多し花に香二種あり

桜桃　実も小にして実熟す四月に熟す百果乃先ず桜桃熟す

山梨　秋月に多し叩て搾て実梨を洗て

山椒　所々山中に多し其皮もきざみて食す但皮と

に付て本枯る冬山椒も葉落て不枯実も常の

山椒のごとし又大山椒を食ふ人あり

葉萸　三種あり

蜜橘　柑　橙　金橘　柚　花柚　山椒　山椒山中に多

し能中蜜橘を作る郡中に作る能登川村に産すると

能登川蜜柑云郡丹生村に多し是又ぬ実と

歌市庵村に大なる橘樹八枝梨の乃ふに七号或人

南北八百二人を又博多に多し橘に三代実録

仁和二年正月二十九の条下に曰左京府に小柑を

例貢す十月三十日ゆゑを以て貢進乃朝こん芋を
先祖限を立て有て今是を宝ひとる極ハ
ひゆゑ小植と故せ[illegible]
と怨る有て解[illegible]
上野下野ゆゑの[illegible]
国の中ゆゑ上産絶れ山中ゆゑ
ハ[illegible]
土地の[illegible]
橘を橙二種をりたいくるゆふすあり常[illegible]
ゆゑ橙を[illegible]
らしゆふゆゑ国を[illegible]

其味英ゆゑ是を称して苺[illegible]と云

泉草類

亂麹草 黄花[illegible]
文く食すゆゑ[illegible]
是を用ひ[illegible]
菊 小あさゝあり[illegible]
又濃菊あり食すべし
蘿摩 其葉ゆゑを食す味ゆゑ性ゆゑ[illegible]
すゆゑ地[illegible]
荇菜 俗れ池[illegible]
[illegible]ハ荇ゆゑ[illegible]

睡蓮　葉を荇菜と称す茎ハ白き八寸ばかりにして蓮の
ごとし日中に花をひらきて水をさうの末の如く花
開かずして水中に入る故に睡蓮と云
菖蒲　江戸池に生じ食すべし葉ハ細く菖蒲
に似のごとくなるものを塩につけ置て食するもよし
青菅　村々に色黒し毒すし　神麺に用ゆ
莫菅　毒菅に似て誤て是を以て毒菅とし
やすし　弁すべし
鴨草　江戸にハ人家常用のごとくハ少なし多し
鉢中に生ず駿河国浦村に似たりとすべし内海煙草と云
霸王樹　京都にもいまだ見ざるもの　家にて

毒草　毒草なり　毒を為す
漬木瓜　漬芭蕉　漬茗荷　家傳志ア和漬
多し　万年青　万年青　古哥に詠ずる
虎杖　大なるを杖とし小児食ス
葭竹　海辺に多し　葭　杖に成　筍を
無腐と法す生なるハ切て臭とあるかゝ成
やけず
落葵　つるを付て食す　実紫色なり
石足　深山の中にあり風尾草に似たり
是を立置れば吳とし　庭園の飾とす
白屈菜　其茎ハ紙捻状と消す　其茎　黄なり

知風草　ひくくして芒ありて叶葉の葉草なり
節あるはいと年久風吹くもいとも悪風吹く中
にあるはいと夜風吹くこと次の中にあるはいと秋風吹く最悪
にあれば冬大風吹くこと二度吹くは二度吹くは事度
の書にとるべき出れば日本代治も又称す
蘭草　野にあるて葉にあるものを云芝草葉と毒す
冬葉にあるは医方にはこれを用ひすと云へども性すす
菌草　極波那　美濃山飯塚上庄山中に多ひく
にあり
菊薑　馬にくはれば病を治す
草蘚　ひくの山中に多し　紀中　秋月村に

春にあるものを採て味噌に入れ食すべし
ふ塚にあるものを採て切りて煮て一度ゆでこぼけば
苦みさる飯中に加へて飢饉を助くべし
雲実　毒あり　美濃さいりのにくつを引て本の色
にあるものをつくへし
捨淫草　山中ひくに多し　かりて地にに菓すき
ものを久敷に塩に二月にとりて蔵首を抜す毒を
玉瓜　根を用て粉にし餅にして飢を助く天花粉の
にして瓜に似て紅あり　接ち菓に用ひす
芒と括樓仁と採するものを誤也
蔵菜　俗にいはく毒のものとなすにはいと菓類に入れり後

河國早柴郡山中の村民ども根とうり飯の上にて蒸て夜
々食ス
羊蹄根　腹とはやし癖病を治す一種蒸かさね
刈て又破損とるものを織民ども用て那ゝし袋を
造る
蕗蕓　國俗かゝることを云和名抄に蒲萄と称す
ゝ實をとりて酒に作るに性ゝ甚美とはしてゝ
艾ゝしいぼあざ治ゝ多ゝ蒸すもの也
蒲　蒲ゝ多し芝と取て席ゝ作る蒲黄
卷柏　所ゝ山中ゝ多ゝ
松蘿　サルヲカセゝも云也所ゝ山の多ゝ蔓なり

若瓜　所ゝ蔓の如ゝ形ハ瓜のゝゝし
茄枝　所ゝ多ゝ
芝實　池中ゝ多ゝ其實ハ煮て食す又粉ゝして餘
ゝ飢を助く
松房　山中ゝ生蔓草なり木性ゝし楊枝ゝ作る齒の
茶ゝ多ゝ云唐の書ゝハ又人ゝす松實也
蘭　好事ゝ家ゝ多ゝ生ゝ又坊師ゝ也植ゆ實ハ
三種
蕃　薇蕓　芭蕉　鱧腸草　龍葵　酸漿草
虎耳草　蕁麻　曼陀羅花　石龍芮　毛莨
獨頭蘭　猫草　鷄眼兒草　等ゝ多ゝ

諸竹類

竹　大竹を名那とあらくしくも工産郡山中とあるハ
大くし小竹ハ何もの所にも多し白竹　紫竹　班竹　大名竹
真宗竹　義竹　きん竹ハ竹ハ竹ハ竹の実
多り千年南京竹呉西にうるる是義竹ハ竹人きの筍
を食すること甚しく

牡丹　凡太史及ひ博多蜀人ハ家園師の園ち院乃
屋とを所の牡丹多し尚時天下に牡丹の賞翫
高ものゆへ話那と是を栽す鉢中多あるハ鉢植と
共一と云ふ京ハ京都江戸とおのく園鉢植
紅鉢植白鉢の名あり

苟藥　是又佳京多く話国にもまた凡苟京ハ藝
別唐語と天下一と世しらるも今ハ唐略ちう此国乃苟
京ハ名きりと云

菊　是又佳京甚多し其ちと京ハ五菊七菊ちと云て
唐ちうちめて此地と異なるも菊ハ博多
にてあると物ハ博多ハ菊ハ名所多し博多菊毛
と称する名菊を話国にも称する也
延年花　是れ唐ちう黄京ちく枝ハ先と根生ハ土
とつけハせし安し

躍麦　やうとなりしこハ山野に多し大と唐接ちと
小にて花咲く又和んと石井を活用むを

常夜の花とゝ名付の事なり

棣棠　八重ひくくさゝり八重咲ゝとゝ又白きひくくさゝり
花とゝ八重とゝおゝまゝり梔合山吹とゝ名付て玉たゝしては
あゝと言る

玉簪花　毒あり二種ゝ一種ハ鮮きたゝしとゝ
葉たゝ一種ゝさゝき草と云葉ゝ小ゝ
白丁花　此地ゝゝゝん京都ゝゝハ白丁花と云
源氏知ゝ四月ゝ小花と咲ゝ二種ゝ一種ハ河原沈
白丁花ゝゝ

桔梗　葉平ゝあゝ白あゝ八重一重ゝ又ゝ山聖
ゝ生ゝ

芽子　冬ゝ葉の引ゝ枯て薪ゝす又植ゝすゝし民用ゝ
利あゝ又宮城野萩ゝゝ家園ゝ植ゆ葉ゝ
ゝ白ひ祢　黄白数種ゝゝ園中ゝ植ゆ八月の山を賞
郭ゝ移村ゝ種ゝれゝゝ白ひ祢多ゝ

茶靡花　菊ゝゝゝゝ葉ゝ咲花ゝ故ゝ高
ゝ開到茶靡花事ゝゝ根ゝ沈ゝゝハ沈ん葉ゝ云
百合　正月ゝ多ゝ葉ゝ葉ゝ花葉ゝゝの多ゝ葉ゝゝ
花白きゝ用ゆ又鬼百合ゝ花ゝ苦ゝ舟ゝ名ゝ食ゝ味
ゝ白ゝ苦ゝ

玫瑰花　山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ香ゝゝ色紅ゝ山地ゝゝハ
ゝゝゝゝゝゝゝゝ

海棠　此花元ハ日本になし西保年中唐より
来る淡紅色なる日本にも有り
佛桑花　牡丹の如く大なり色葉多し
彩多し四月より咲て八月に終る
庭櫻　山櫻桃の如く実多し黄白にして甘く
し淡紅色なるもあり
薔薇　彩多し八月に咲て終る白きも淡紅
なる一重にて多し白きは又月毎に咲
多し
檀特花　葉を載せ枝に咲る実多し
蓮　夏月に美人蓮即是なり

山礬　金絲桃　蜀葵　鐵色箭　旋覆花　木槿
品類多　等なり

海藻類

神馬藻　麻角菜と称す長くちぢれ色黒
くして長し古歌に川は狭くなりぬれば
も志賀の浦波川は浦とて春すぎて味よく老る
を摘たるなり
索麪苔　京俗称地海苔多し　其外大鳴　志賀鳴
形鳴と生じたるものの如く長くして色黒き藻
味甘し是とろろ掛と碗に或ハ佐と和て二杯酢

雅海藻　大崎　志賀浦　大蛇崎　二孔岩　海藻多
し　能中　地名　孫の俗　長さ　傷　てう
海藻　亦
紫苔　所々の海濱にあり味甘し所々あまのりと云ふ
出雲國十二崎のうちにも長さ五寸ばかり
海羅　所々海濱に石に付て生じ長さ一寸ばかり
食す　味甘して挽し是をこぬのりと云ふ其大なるを
水にさらし干し紙量にて用ゆ煮て糊に代用多し
末滑海藻　大崎　多く長さ　故に信に大崎を吹
めの大崎　織氏　干しうるを刻みて煮て入食す
悪わざ歟

海薀　海濱崎　所々多し長さ　藻あり
河薀　所々小流　能中　佐五郎　高和村の小川
井糸村の松井川　郡内　郡　飯盛川　多し
海藻　所々色黒　糸をつるめ　形
養して其味　但小疾を愛し　ゆ
病人食す　山藻　北に向て流れ川　八
云海藻　藻の新　て八　之
さし
石帆　大崎　所々　黒　黄赤　二種あり　実
海苔　海松　鶏冠苔　鹿尾菜　凝草　海髮　毒

奇食　於期菩　龍鬚菜等有り

樹木類

薪炭　國中薪を取る山多しあけくかたへ雖し福島博多より迫りして切出てうるハ子良郡の奥　石竈田渕脇山内堅小山木　佐土郡飯場形河部　山戸の敷村　和泉屋郡篠栗萩尾久原若枝須恵　穂波郡八木山内住吉之炭とやく所も亦同し　炭を鞍手郡大隈山より毛年多く出つ　稍ハ薪炭ハ多く出つ　治岩多く出つ

杖木　杖木ハ多くして筑前の事上座郡佐田山筑田中郡上氏次て鞍手郡大隈山大賀畑穂波郡和田山嘉穂郡桂川山佐土郡立石山早良郡荒平山等迄毛年多く伐りて杖木ハ多くしてこれ

松　國中の山野に多く松を産ス其中に松原と称ス亦元ハ亦あり　筑中生松原第海松原等ハ古哥に詠して云名るし　壱岐郡長の松原　松原市庵し毛代多伺　蒲原村の小和泉山松原　亦廣く茂まり又場所ハ山に松樹と為りて亦多く直なる枝とかつゆるとして作り松し　庭上の牀敷の黄瓶として其ハ亦五葉雪あり

松葉　松ハ多き変茂多し　取て薪とし民

の利用多し又度々勅して雅趣を助く
茶　霊岩山大蟲所化茶湯記に曰く建仁寺開山千
光國師　栂尾明恵上人同船して入宋し同時に帰朝
せり時に茶実を持帰りて筑前國背振山に植る
是を岩山茶と号く上人是を栂尾に移し宇治
に接せり今光國師入宋の日蔵山の高僧に問ふ
ふるそ人ハ凡日本に茶と云ふ事尚國を始とす
むかしハ背振の山にやしたハ背振山のふもと
板屋村に多く茶を植ゆ又板屋村の下松尾五ヶ
山杜用代川上村乃山中に多く生ず
枝　上野郡小石原村の山中に産する所乃枝其大
さ五圍に余ること節を隔て真直にして英枝なり
他国に於て甲と為て見る所なり所乃枝を作り又播
磨に産する所乃枝を作り又桶巻とす
但し未理直にさけす所乃桶巻と
すること多し
又若松山に切皇后御宮の前にあり古
幾松　箱屋敷乗雅　神功皇后御宮の前にあり古
平にもあるなり其枝葉常に枝を高かうもつ
梅　白梅　紅梅一重八重　城下に梅十種
あり肥後梅と称する其花実ともに大き是又多
し又消梅あり花中実なし小さし　聖福寺の和梅ハ
其大なる事世に勝れ甚稀なる英枝と
きこむ

桃　紅桃　白桃　金銀桃　垂絲　緋桃　八重桃　緋桃　みな
不多し　油桃と云ものを其実椿と似たり　一名桃もち
実を植て翌年実咲く
木芙蓉　紅　白　草　葉あり　扶蓉　蓮と似たり
花と木芙蓉とを用て花とし琵琶の撥
黄楊木　秋月古河山にあり　用て櫛とし琵琶の撥
とす　又作あり　是又くしけずるに木あり
云へり　かつらと云小木にして枝曲り　枝本にて立
茶代具に用ひる　茶筅あり
安石榴　酸と甘と両種あり　又実に多くあるもの
あり　実小也

樺　上産郡山中に産る　又槻あり　一類二種也
楠　国中所々に大木多し　其大き数囲に及へる木也
高千穂下益村小中代社の例にある楠　国中第一の大木
高り十五抱に空洞方二尺ばかりあり　此に張氏活邦
に於て　いまだ大木にして大木と称す　物産部宮崎の宮にも大楠
高り　所益郡山家村に仙人木あり
比比　ほうのきと云木也　樅乃木と似たり　実を油を
柘桑　所々に多く実を食す　又枝葉似たり　ふ
像大魚にあり
風尾蕉　所々園中に是あり　一種番蕉あり　矮少
よりて一株より数株生る　盆中に植て清賞す

接　芒草等多り所々山中にあり株を去て能井
戸を掘て山水を取る毒あり食ふ
へからす
塩麹木　海辺に多く葉に鹽ふすゝの木あり
るよりこれを採る
椋子木　其実秋熟す味甘し小児好て食す
葉用て本紙を作ふ
紫微花　百日紅と云六七月より八九月まで花さく
を木を接すへしと云
海棠　二種あり志海棠八実あり食すへし花も
千度海棠と云ふ実をつくらす本草

山海棠も実なしこれも花を取て邪を除
き中へ山水を
衛戸　二種あり夫とゝきとゝきは枝に刺あり是を
の湯戸多り兎角もいふ枝を用ひ
あをふせす一種ねをしてあ実なる本草
石南花　山中所々にあり能中於河郡南面里村の
上の山に多くあり沙地に生ずるなり
山花料　山中にある本草多民に葉をとりて飯に
まへて蒸して食ふす味殊に飢を助く又炊く
ろとりあり飢饉に飢を助く
惣木　山中に生る村に生芽立あへて食

す味よく毒なし

罌子桐　桐の木に似て其実をとりて油に代用ゆ或説にて笠をぬるに利あり

実に毒あり食すべからず国俗是を種く利あり

海桐　鎌倉新池河内に多し笠杖にすべし京都の産

茅に似る桐も是なり

木犀　城下武士宅に大木ありて村鄙にもまれ

歴木　菊にして炭にあり

茅栗　竈門山にあり栗のごとく実を拾ひ煎り

辛夷　正二月に白花開く赤き実を大木あり

接骨木　木にうつ木に似て葉は菊蘿のごとし

女貞　葉に実を結ぶ冬にもなり

冬青　二種あり一種は葉もちに似て一種は葉に毛ある実なり榎と切て籬にすべし枝しげく

檍　あをきともあるべきにあらず枝しげく

葉に実なる色赤し葉ふたつにて実のみく

木に象牙紋のごとし

空木　茎は卯花に似て実なし卯月に咲く木は泡立

用あり

草栅類

岩草　市笠郡竈門山秋須郡古河山に産す

大岩と付て生じ其根必ず岩に絡まりて取るに労す

麦蕈　松露の如し是白砂の地と松葉ふの淋蔭に生じ地と面後に多し黄白二種あり白と上品にして性平にして毒なし其味美なり味い美と久敬と協す尚す但ほして茹と云又酒と つくまに久しく損ずす尚

函五所の松茸及志摩敬小重九粉屋敬多須乃松茸に多く産す山ふかき地に多し松林多きゆへ地ふかき多し毒なし二度を度秋ふかし砂地の松林の内に多し

皆産し山との松ちまを掃ふ所にて多く毒を食ふへからず

金蕈　八九月山野に産す松露と似て莖あり

こまつ黄にしていさきよし故に今こけとゆふ松林のこ

安山と沙地に多く生じ松茸に類あり味美と毒なし

紅菰　こまつ紅のごとし毒なし

初蕈　八九月山野に多く生じ其色淡緑にして桐

葉のごとし食すべし脆松松として味よし毒なし

香蕈　所々源山杉中又は林中に本に付きて生じ

柳蕈　柳に生じ

針蕈　長月京野に生じ其形大針のごとし毒なし

ごとす余多にうすし宮多く味あり嵐にけと洗ふ

平蕈　山中の木に生じ

蕨蕈　所々山中地に生ず

嵐草　所々山野に生ずる嵐の毛乃如くにして大なる叶に似て又白色黄色あり毒なし

雁茸　秋屋郡宮英山秋須郡杜月及山濃郡鞍馬

郡直方郡にもあり和州にもこの類多くあり

毒あり五可食

木耳　所々山中に多し

松蕈　佐土郡高祖山郡美濃山越後郡合

屋山大和山和屋郡宮英山杜山郡大濃山秋

須郡杜月山善提寺山下総郡屋形原城村横原村

武蔵郡三好村等に有る亦の山にも有る

土栗　松露の如くにして小粒にして二

月四月の頃生じて食す味本舞のごとし芝馬勅

の類の山にも生ず

筑前國續風土記土產考序求漏

此國ハ西京の地庶く肥饒の土産し山ハ高く峙り海河ハ多く廣し水陸共産多し又異物稀れ繁化の住民多ハ人寧府を置て名を百物乃集まる所天府の宝と云へし余ハ筑紫の内とあまく猛唐にて略云あゆる國土産のこの浅知ハ志ちあれと國土産生ハ物産ハ天地の名と知ること知ぬも多くれハそこくのこの名ともあり記し難し唯其大略とのすのこれ庶物の名目新快ハ兼て大和本草と記しこれハ書くハ云しわ

寛永六年雨水日

八十翁　貝原篤信書

一鎧　岩井源助貞勝元加列の士之奈良京都にて
[illegible]と[illegible]事と[illegible]京岩井[illegible]者の弟子
[illegible]り　長政公貞勝と[illegible]尚[illegible]招きて俸
[illegible]と与へ[illegible]　忠之公古初の[illegible]と貞勝[illegible]
子則貞[illegible]子貞枝[illegible]の枝貞[illegible]又貞勝の
舞源次[illegible]京より招きて俸禄と与へ[illegible]其子
その動[illegible]久次[illegible]舞源[illegible]次家
[illegible]り久次家永[illegible]良[illegible]て　忠之公　細政
公　吉之公召新の[illegible]と[illegible]す　合子の胄一谷の胄
のうつしとも[illegible]書面[illegible]亦良工[illegible]
合子一谷のうつしれ[illegible]次[illegible]化せ[illegible]

一　半弓　若狭守の子孫にて九郎左衛門と云ふ兵
法者の新九郎殿ハ弓を能くす其子孫ハ高木
して来る新九郎殿ハ弓を能くつくり八郎と号し又五十嵐次郎
と云者なり犯罪庵住ほち法家にて仕へ彼家を退き
流浪して来る山名迫戸瀧若狭法を学ひ弓矢の
製を伝授せり　忠之公呂出でまし八郎に問ひ給ふ家
に於て瀧若狭と仰せられ良工と云家蔵茶入四一名
と称せらるハ深川横岳秋の夜月と横岳ハ酒井
讃岐守忠勝へ秋の夜月小倉宗山城守長頼へ　忠之
公より給ふ深川ハ國　君にあり同時の智耳付の
茶入も名を世に知られ横岳と称せ知られ

一　芦屋釜　古田織部殿より云ふ良工也藩国より求て
新芦屋と称す

一　鍋　鍬　鼎　水を持る器にハ情多り多く居所を釜
屋下と云其余の所にも住ス秋頃郡耳木町にも
持工あり

一　高麗瀧若　忠之公の時に小堀遠江守正一点茶
の宗匠にて仕へ居住せり彼の八郎と云ふ八郎
とお添へて仕へ居きり正一のねがを得て茶入茶碗

水指を製す八郎ハ勿解の産にて次の女子
英寿の新九郎殿ハ高木に生る其子八郎ハ高木
しして来る新九郎殿と つくハ郎と号ス又五十嵐次郎
と云者なり犯罪庵住ほち法家にて仕へ彼家を退き
流浪して来る山名迫戸瀧若狭法を学ひ弓矢の
製を伝授せり　忠之公呂出でまし八郎に問ひ給ふ家
に於て瀧若狭と仰せられ良工と云家蔵茶入四一名
と称せらるハ深川横岳秋の夜月と横岳ハ酒井
讃岐守忠勝へ秋の夜月小倉宗山城守長頼へ　忠之
公より給ふ深川ハ國　君にあり同時の智耳付の
茶入も名を世に知られ横岳と称せ知られ

正一位菅丞相の末裔なり国君[illegible]の八郎を
勾鮮[illegible]末裔八郎の孫[illegible]八郎八郎の孫[illegible]今乃
次郎[illegible]次郎の孫[illegible]菅長十九年の[illegible]
那内侯[illegible]て[illegible]す

一 辻堂餅 餅[illegible]門前辻堂町にて一家[illegible]を製す

一 玉子素麺 牛房餅 [illegible]飛龍頭 [illegible]

[illegible]へ[illegible]す 他邦[illegible]長崎及他国[illegible]の製法
[illegible]も尚玉の製[illegible]及 国君の[illegible]て
製す其法[illegible]

一 杉餅 杉の[illegible]て製す 他邦[illegible]

一 黄餅 博多[illegible]の色[illegible]黄餅の製法を
多く製す他邦[illegible]其中[illegible]
製る一[illegible]味[illegible]
重把[illegible]

一 家鴨 又鴨[illegible]書く[illegible]

一 鵞 大鳥小[illegible]尾十二枚[illegible]十二枚以上
大[illegible]

一 鷺大小[illegible]五位鷺[illegible]

一 鳩 斑鳩 鶉 [illegible]鶴[illegible]
と補ふ

一 鷸 小鴨 山鴨 羽斑鴨 [illegible]大中小[illegible]上鴨[illegible]
[illegible]

一鶚　高味美なり かやくさなどゝ唐の書に鶚鶚と注せり

一三光鳥　上総郡高殊山志波山直方郡多し是烏風の新なるべし

一蒿雀　猟月ころゝて黒焼にして血とゝも下血に

ゝめ毒虫のさゝるゝつゝへし

一燕　大小二種ありて大なるハひへるゝ白色なるゝ

又常のゝもゝゝ大ゝして尾上赤く胸に文と

切ゝるあり巣も常のゝもゝと遠ゝ穴をほりて出入

す是迫年ゝゝ来る

一ちやくちやく　又ちゝゝゝ云あり大中小あり

一水札鳥　大さ鳩のゝゝ其色灰多くして白ゝ点あり常に

黄ゝゝ色の高味美し食の病に用ゝ功あり

一都鳥　嘴足赤し白黑相雑て大さ其形鳧に似ゝ

行勢拙ゝ毒蛇ゝ殺せる都鳥なるゝや定難し高雅の浮

ゝのゝゝ

一秋鶏　鶏に似ゝ大なるゝと鶏に劣るゝ小きゝと黑ゝゝ

方言ゝゝや

一漫畫　ライハ食すべきゝのゝ糞を拾て食し

漫畫公食を求めて国労すゝ二ゝ其性同しゝゝる事

陶九成の説に記す

一鶺　むしくいのゝ一名ゝ永年中紀州ゝゝ来る其後

多し

一 暹羅鶏 蕃國より傳来して長崎にて賣る鬪鶏と
なり 俗少し衆人賭をなして大國にもあり又烏骨鶏
を鶏鶏をむし黄國より来る
一 援乃葉 形と味も鯨のごとし三月のころ枝葉の行く
江川又形河新五ヶ山乃川に多し川岳五新飯坂にもこれ
こもとつる味美なり
一 鰻鱓 一 鯉 多く川池に多し
一 鰌魚 白黑乃紋あり
一 きすこ 味甘性寒 病人食すべし
一 太刀魚 刀に似たり性あしし

一 海鰻鱓 うなぎに似たり肉餌にしてよし
一 文鰒魚 五月に多くとる 一 蝦 江に多くあり京傳新六宮蒲に大なる馬刀あ
り 長七八寸もあり
一 蜆蜆 一 蛤 蛤に似たり
一 擂鉢 海川の産淡のごとく上旬下旬肉多し
一 大豆 搗て漉て多く絞る枝葉豆腐亦多し
爲穀既に長て彩穀来る 寅のころ民用薪
一 胡蘿蔔 根と黄白と黄と
一 猪活 幾内にてうどと云山國にて三ツ葉と云苗始て
出る時に賣す其根煮て食す性よし

一紫（ヒニイ）　つくさ時食す或ハ湯にてもかしても食す
又根水干す事薇の粉と性味すこしもかわらず
一防己　ほくらほくろ　ほつほつとして繩のごとくなる用ゆ民
と勉く山中に多し
一當歸　川芎　藁本　地黄　麥門冬　天門冬
山梔子　紫藤　葛根　蘄茝　細辛　香附子
香需　白扁豆　甘遂　車前子　玄參　苔參
菖蒲　栢子　茴香　白茯子　高陸　瞿麥
金銀花　白茯　菌陳　鬱苑　金佛子　棗
白皮　木賊　叟朋子　益母草　澤蘭　黄精
牛膝

一麥　菜と入る深笠にて拵ふ甚笠と麥ごとふ
沼鴨利休おり書るるものこれはるつあるるとこ入り
一吉梨樹　毛用茶ひけ二月に味熟ス冷ス一百
果の実ふけ多り白れ木云何哭ふもこしさくこと云
一故柳
一蒲萄　ほくこあり
一珊瑚（ヒンワヤウ）　葉を摘て沙て堂ケくこ事二尺余枯ル
赤きこ実多り彩ふ強ス一
一風茶　山中ほくこ
一妙（景）事の家に多く植ル
一彼岸櫻　櫻もこり十日先立て咲く又熟若

一 さくさくさう

一 垂絲海棠（イトワッウ） 彼岸さくと一緒なり海棠の類ひとしはあるさまとしてもさくこしらへられあり

一 海棠 南京と浙江との二種あり山海棠ハ本邦名

一 石南花 肥前の南面里の山にて多く赤色と白

一 水仙 常花と金盞銀盞とあり共に

一 山茶 牧野氏の云ふ山茶南京山茶共に常花ハ

こ[illegible]

一 茶梅花 海江にて十月より咲て二月まで おのの

一 鶏冠花 南京物なりとて[illegible]の花の

あるハ是也一[illegible]

一 牡丹 [illegible]牡丹と[illegible]て[illegible]紫葡萄と[illegible]

を代[illegible]國[illegible]やがて[illegible]唐さくこ[illegible]

葉きくこ[illegible]絶も山塚[illegible]の山[illegible]多く日本

[illegible]

一 [illegible]梅 小木にて葉と[illegible]三月[illegible]す一窠より

叢生[illegible]十二月と少き[illegible]花を[illegible]く其名葉

のこと

一 木芙蓉 和名芙蓉あり

一 熊谷 敦盛と[illegible]行[illegible]

里と稱[illegible]ハ指[illegible]

一 下[illegible]毛

一 笑靨花 一寸ばかり多く義生まれ出て多く実を結ぶ
花を○て内くれなゐ

一 金線梅 二月に花さき六月葉茂り実をかれて
只根のみ土中にある花開すし

一 孫梅

一 梅 正月にさきてよく作り生長し安し

一 柳 多くうえて新とする事度書にえんぐう

一 梅 なかの木は義生まれ出て皮も第とすべし

一 櫻 新にて烟かし

一 梅 ちちもも

一 南天燭

一 椿 むかしは日本にすくなし近年寛治の万福寺と称
とりもめて後る今は多し番椿と云漆
の木は義生まれ出ずるすこし香あり万福寺は俗
称に番椿とする其木多く出来る根の皮は第種に用ゆ椿根皮と云
一 ちしやの木

一 槐

一 槲

一 ゆすの木

一 いちいの木 種多し

筑前國續風土記 土產考求漏終

筑前國續風土記萃漏

大長寺

元和三年京園ニ三十三回忌ニあたるゆへ福生山と
改て仏光山と称し京都ニ百年ニあたる種田九郎兵衛
昌信 若狭と称して代参と勤む 光之公厚敬
参詣ありし

長園寺 黄檗禅宗

此寺もと筑前郡小水村にありて清月寺と号し
黒田長政の創立する所なり開山京溪和尚と云
元庫法号と清月と云ひ清月寺と号せり
京溪の弟子宗誕和尚も明光の再興の住持なり

京師にて出家せしめ給へ　忠之公の御母
大源院君其時と者称し奉り　勅願寺
なり　一寺とまことに　[illegible]
功成て生涯不尚と号し給ふ　明光寺殿
忠之公より京師に出世せよ　命成家し給
但其の侍に　[illegible]　時
一寺とまことに　[illegible]　忠之公
号に長て京師に　寺号とあらして　長圓寺と
恵打ちれ　長崎の号と称る　其師　玄溪和尚
の所望　[illegible]　根源新清月と称して　[illegible]村の南
代南の山の上に　一寺を　創し　清月の号を改め

長崎に号に此　玄溪和尚の位牌及創立の
日記　玄田兵庫　[illegible]
京師に寺の山号　定め　[illegible]
国に　端　[illegible]　青龍山と号に京師
光寺と　真　[illegible]　彼寺に住持す　時　大源院君
り　[illegible]　保科淳四郎の妻　[illegible]
義り　墳墓　[illegible]　淳正殿　夫婦の位牌　安置す
又　大源院殿の　[illegible]　明光寺に　[illegible]
[illegible]す　長圓寺　大寺　[illegible]　国に　[illegible]
[illegible]　[illegible]　明光寺に　[illegible]　四郎　[illegible]年
忠之公の命　[illegible]　菩提寺の南に　端に　今　[illegible]

寺塚村にうつしを移すべし

浄念寺　西山派

海龍山と号す宗山桂岩の弟子と号し慶長五年
寂す此寺及大坂の國中浄土宗西山派の寺院を
掌る寺院と照福院君の尊牌安置の墓あり

長福寺　日蓮宗

國徳山と号し天正年中京都妙覚寺に属
すべき始め慶長元豊臣秀吉の時此寺の住持日安と
なり　後に寺を造る　法華経を
なす　長政公能茶の入國の後あるとき
なり　福寺

桂木町と地を移して慶長年中長福寺を創立
すべしと日安と以て此寺の開基とし後日照と
なる内の狭小なるをうれひて　國君に上て西町
の地を乞寛文十一年にこの所に寺を移す家保
二年五月大通寺と改む

今熊野社

祇園の社の北にあり熊野社を東面する横興
あり三箱五尺所の西にあり熊野権現の小社あり
ここにて此所箱とし熊と云

入定寺　真言宗

松見山自性院と云其始を何の時にあるか住持

なく幽なる庵をしめて　長政公まをして寺とし
もふ岡山を　長政公の家臣三宮英元一城の海文唯
心院殿にまつり給ひ後別人にて十七歳にて出家し
三別にして一寺の住持にて　東照宮山へ御ゆき
給ひ　もい彼寺と御祈願所にて　御陣場
にも国心とり連られ後別安陪野と御野の住
持となる　長政公薨去と聞給ひ後家臣
義作と俗縁なりにて　東照宮へ御願ひ
けるに義作に英元に来地を庵新三左ふ来の村と一石
年貢にて　夫より増多にて　入定寺乃
地にて居宅に入くすめり　多心院にて入定す

へきよしを　長政公再三元にて　御ゆるし
しにて　後ゆるし成業　二七日に会して　後定に入
三時の勤行にて　死し　寛七十八入定の日　長政公彼庵に
ゆくとして　死し　寛十三年八月　日の眠り
ありもいの事にて　元和元年　宮へ
もい多心院にて　世を　但元信に　御願
堂とまをす　仏　多心院に入定　長政公佛堂をまをす
加茂図面奉行すし　附庵宝の地　狭めなし　迫
まの所求買添て　佛堂を元和七年に
出発す　多心院入定　地をまいて　号を入定

る〻定なり〻大德寺に同和尚と語く寺号と書しめ
佛堂の扁額とせしとは寺山号を杉見山と名つく
院号を嘉〻と〻つく自性院と云名号を石祢と称
りてちのちるとます　長淵ちうす石寺附しるし
光之公誕生の後御祈願にして毎月尚ちと於て
武運長久の祈願をくすまつり　たゝちうす命し給
ひて彩〻として毎月一石の米を寄すし

明光寺　禪宗　曹洞

寛永五年國君　忠之公の勅願にて再興せり
は時の住持は生雄宗誕和尚と云尚國の人なり
ゆゑ過系のことは詳ならず　忠之公は御母
大淵院君に帰依し常に剃髪して行ひ給ふ御
志の事とて　大淵院君知せまひ御壮年にて臣
くなる事を哀とし送るの事あり此人ゆゑ拾学にて
功成〻ハ遂に一ちと建立しつゝ父母のみを
供養せんとて先老保科肥正直の遺骨及先妣
長元院殿の髪髪とあり又自叩れ剃髪と称り
吾没後ゆゑ此地にうつし置へしと約しまひ拾学は資
として黄金を寄とのみ宗誕命をうけて辞し去
り曹洞の禪に入りて修す勤学し一食草座の
艱難をなめ後　大淵院君の寄りうもりし黄金と仏
寺建立のことを行ひ給て　おも費をはして一ちと建立

[illegible]（時宗派も国司迎せしなり）尚寺改造及び再興
すべしとなり国君 忠之公志を感ずるの余り
材木を寄せ照福院君 大源院君もおのゝ義
を施し興くなり明光寺の再興成れり
則西道（法名建福院天関秀公居士）国夫人（法名長元院授法大姉）乃塔を立
大源院君逝去の後彼乃薙髪とゆかりの人
各塔を立て各一壇と接し位牌を置つ保科家八
忠之公乃外祖父なる故忠之公寺産五十石寄
附し給へり（元禄年中博多火災のとき焼失し後東町の方に門を
建設す）

那珂郡

住吉社

天文の頃大内義隆国防の山口に在て防長石二州を統
安芸備後を籠下し大宰大弐を兼任して筑前
豊後を進止せり山口尚社の神官伯宗徳奏正
通に対せり神社造営の事を仰せ出す山口
にゆき大内氏に造営二年を経て成就
けり上尚社の古事と異なり神殿を建て天文廿
年住吉に移り奇瑞と称す承応文書の写る
へき奇瑞遠く聚へ山口のてき中と戸入に義隆
詣宮し潔斎して右の系図と博内に献し保見あり

治承兵火にかゝりて多く亡びぬれども尚帝の御
不遇なる中に醍醐堀川後鳥羽院伏見院後宇多
帝等の宸翰御製和歌御願書ども藤家一字
頌十五首匡房經信良經俊成定家慈圓西行寂蓮
等奉納の和歌貴僧書写の經巻を亦数多の經紀
に開白忠通公の筆巨勢貴張画圖てをたるも
皆都より山に入りて居ます公卿とをしの甚を弥
を世に出す義淳等同なりし帰敬一造営の事ハ
ふ及神祇も数ケ所荒廃の時一なるを定く
二人の神官も洛外に罷過ぎるに四年の秋義
淳の居淘尾法号時資入を全妻の叛逆にて山岳為

城し九月朔日義淳ハ下長門國大寧寺に於て自殺せ
ら彼宝物も此時城中に庫裏に納け置しを西氏
事絶に其上二人代りの義淳乃一旦代思とをの義淳
の陣に池加りて二人とも落て死しまに彼宝物紀
弘乱に及ひ利時資入乃も移ぬ毛利元就に亡されし
ゆへいよ〳〵散失し再び東宮に帰ぬ
ぬ或ハ長門の住ものとあり或ハ毛利家及東宮
寺院高家代拝を称して中國に居まるもの

後に小松院御宇今川伊豫守貞世 法号了俊 探題として
筑前に下向の時正徹 童名幸菊丸 具せられて正徹
和歌を冷泉為尹卿の門弟として貞世の指南あり
しとや其歌集を草根集と云 凡人あつめたり 関白兼
良公序を跋しまた東福寺にて栗棘菴の一隠に
松月庵と云小菴を構へて住たりし東福寺の内に松月
庵を構へて住たるを松の事なり
これ此寺にある桐の葉わけの林の三日月と云ふ歌 千とせもあへ
詠じたるより此庵にて山科に流ちし所 山科の草
庵を招月庵と号す 此所にて年代くれしに 有に
なれあふには…のゆふくれに と云

秀歌をよみて一流の祖とゆるされき 東福寺にて久しく
康正のころは七十余歳なりしか東福寺の門派清巌
禅師となりて志ふかくなりけり和哥の事にも偏ること
て住吉の海をみて小庵をいとなみ言をも松月庵と
称して二年ありけるに其後冷泉家より消息して
田舎住まゐを想憂るらんとて勧められしに あはれなる
鄙と都とも住なしと都に帰を住まし此里とよみて
送りたる其後の彼乃あまたるは坊にゆきて
うつしたるたてしむしのつきて庵の身のうちいします
この庵にてよみけるを略して記さん
いまさらにいまあらへきよのうさ人のよを世にも去てたる其て

おのつからあへる時なれやされハ水をおもふ人月を詠むに
歌よみ代々なれハとも七十に老てさるのましきなれ
まさしけるのかゝる　丹後守て　此丹後守当時の事なり
おのつからちるる露をもかけさかぬるいのちのいさよひのみ
正徹ハ長禄二年五月九日七十九歳にて棄世せり

宗福寺

此寺ハ御笠郡横岳のふもとにありしを　長政公当家の墳
墓乃地として且冥福を求んとてうつして移して改立
し　如水公の墳墓をも築かれ是をしめられし其碑
銘ハ禅僧玄蘇長老是を書けり此僧ハ南禅寺の霊
福寺に住持し　又対馬にわたりて　秀吉公の命をうけ
て大明の朝廷にいたりて筆談し呉国の郡名を称
せられし後　長政公とめて墓所に葬りて墓を築き石碑
をまでたてし　遂今に至りて碑名は林道春是を作られ
是忠之公の時に　長政公は此寺をとろしきて移し
改造しおはし　本主也此所ハ第済や千代の松原石た
このみしきてそいさきよき地也　先公の神霊を
移して安置しまゐらせしことあらしてハ此地に宅地をとめ
おはしもおへけるなれ　長政公に殉死せし　高橋作左
衛門匡順か墓も移したりけり　東市正隆政に殉死せし　四人
古屋十之進　村瀬市之丞　桜橋半左衛門　岡井市之丞か墓所
隆政公の墓の前にあり　古の外今此寺に安置するなる

位牌七牘をたゝ記す

春光院殿善岩宗卜居士　黒田下野守重隆

心光院殿滿譽宗圓居士　黒田美濃守職隆

梅溪院殿天秀妙貞大姉　忠之公前室松平氏

東陽院殿五峯宗印居士　前黒田甲斐守長興

宝嚴院殿海壽宗鎮　酒井雅樂頭忠明室

勝真院殿月岩宗照　後黒田甲斐守長重室

本源院殿南英宗菊　光之公男市之助早世

竈門山

元禄十二年時の座主摩伽院兼雅國家の安全と
いのゝんとめ又國主　綱政公四十二歳の災厄を拂ゝん
とめ癒ゝを祈して國中入峯と修し毛三月十
五日因幡の衆徒と多く川つまて竈門山ゝ先師の
宿ゝゝ入和月公の京像孔ゝる山をゝけ出竈門山

と称する三号稲荷大明神像形河内国三郡の内凡二十七ケ所と強唐して所々に修行す福岡の城内に若一王子代社を立て入て法義を勤む

武蔵村

長政公箱根御入国の砌河内国三郡を小河内郷と帳地を給り天狗山の麓に帳屋やしき（帳とは国主天正の頃北条氏滅亡の後帳屋と称し帳屋と称ひし帳屋敷と云）と云所に新宅を構へ家臣小河平左衛門常章と申す者を山の口と云所山の清源の地を開いて小倉と称して榎本豊の付樹岳山に登れば高き

と称して家臣小河平左衛門常章と云者を小河樹を和直と称して混と云所と切り立て茅宅を営しむ

と称して帳屋敷と称し馬場と称り帳屋敷山に代る

河内郷の大山を接り領地の高峰と云て敵要害と

の大山を接り領地の高峰と云て敵要害と

河内郷七ケ所と称す寛享年中又改て三郡動

所々七ケ所と称す寛享年中又改て三郡動

と称して六ケ所二百石余の領地を給り帳屋敷を

造す家士小村及近村河内郷多く在宅す天禄

二年の頃 長政公帳の混代宅を移し

代宅を移し

長清公長重公と山宅を再興し玉ふ今堂仏の額は
堂徒と云て石塔なり

玉川村

古昔より羽前中納言殿仏殿を寄進
長政公御入国の砌羽山権現の社に祈願ありて一山を
立て御寄進とな報ぜしに山村は移し立て後の鎮
のためとて洞と云て仏像と瑞夢と黒田如水軒
国清と彫刻して代々勅願所の祈祷おこなはれ神
前一山可動揺して上宮は神前に有るべし右のやう
羽山の仏ものなるべけれと

月山嶽

九列九号岳の事 宝満山摩伽流と尊し九列九号
峯と申事は修験者は九号岳の事なれ共六峯と申は
豊前国羽山羽前国竜門山出羽国求菩提山薩
摩国飯盛山肥前国牛尾山日向国法華嶽摩伽
流云なり峯々事は申伝し九号岳の事は不審なれ
ども義へも申上るべし宝永元甲申十二月 ホ
永虚舟記録の内羽山記の内三回御登山嶽 結西九号岳と云は虚
舟記録の内羽山記の内三回御登山嶽 二回真弓岳
三回寝岳四回白鬚岳五回雨乗岳六回馬見岳七
回三腰岳八回石動岳九回月山岳なり

下座郡

三たふ本村

義経宣旨延喜式にハ書てハ伝説と城塚と書て
城ヶ和字ハ国中第一の大村と雲南の地にて民家の地
也し小さ川を上座郡佐田ヶ川より流れ出る水源多
しハ村を通り前方とを帝釈ヶ岳と称へ佛谷佐田と
入り小石原と上り夫より小のさ坂とかり郡境
大隈所と出て上方へゆくさと雲南ハ他郡ハ
ちかく又春山へも是よりゆく所以へ入す　長政公乃
寧居ヶ岳花化　法号　瞬酌　ちなハ村及郡中法村と称て
来地と云ハ孫人ちなハて御続して仕ちう瞬酌時

と假宅と云ちうしなちう其家ハ村及い郡中
所ちなちなを宅ハ瞬酌郡翻三度つ一任父の来地と成
す第治年中　光之公国中と巡検ハ本ちなち
郡府所屋のさ長田村と近きちなを川のさと一任
ちなちなを所屋所とちなけなく秋川と称ちなと下して称と
つちなちなと又也春る所遊いとちなしく使無ちなちなを
を後宛文年中又　光之公山所と来ちない一村一任あ
ちなちなを所て稗川と又ちなを秋前後ちなを成ちう

鹿毛馬村

小佐山古家山とていちなへ馬牧ちなし下ちなを方ちなを坂と
第ちなを四ちなを二十丁ちなちなこの牧麻毛の良馬出ちう

なる村の名とせしなり又此村の内大谷山の岩屋に赤塚と
申す殿と云丈七尺ばかりの石佛を其外ども寺もと
ばかりなれども殘りて池もまたいくつも寺ありしなり

飯塚村

飯塚山大岩院ありなり　如水公　長政公朝鮮の軍に往
来しもの府殿と云岩屋に籠りと給ふ
岩屋の中ばかり山にて入口府中に寓居し也
う岩屋長の法代住持切傳山田圃の事とり数度の
事なと文書を傳ふ　長政公国中田圃の廣狭を改
とめ給ふものの府赤戸橋迄の後人と切傳と
加へられ特別なる人と切傳等とする田あり外の

ものなる人名を福岡にも居たり後年その書物と作
く後年　長政公の新後にも安置に寺内と立石を
井三世の信仰南一字一石に法華経とうつしたる
此寺の本尊観音を行基作と云ち寿十石と給ふ

舎利倉村

茶臼山の南龍王岳の下にあり山にて舎利倉寺
ありを世ちに無し　村の名に村中に寺址ありに畠
下の一本杉にてうるはしき大杉なり三圍ありと
山村に西の方にあり　村にハ松屋敷篠窪所と茶の山と
の名代南の谷に入く猪飼と称して山村にあり

大隈町

山町を東を兼て筑紫を西一南を豊前を北を海
し西を松浦を海一北を飯塚を西に四方に通衢に
銘牟山石宗の石ハ北前北後筑後豊後及上方下方新
の人上方へ往来するそこに人馬の通行繁き事他邦
に比類なり大隈守 筑紫に少弐ゆき毎に安
大隈町の城を代うち牟礼村に古城の跡あり 長政
公入國の後此城を捨て後藤又兵衛に彼城を
あたへ給ひて又兵衛に彼地をあたへ給ひ
但馬に此地にて二万石米地と興人彼地を新に
元和元年 公命により元天下國々の城内に一国一城
にすべきよし仰出され彼城を但馬に渡
大隈町に宅を接へ居り但馬に在て別宅を
此方を退きて後 光之公の台岸本に別宅を
其後又黒田退くを久野四郎別宅を
三年三月廿五日 光之公此を遊廉一日村久野氏
別宅に立ちたり

遠賀郡

高倉宮鐘銘

大日本國西海道筑前州垣崎庄
高藏八釗大明神御寶殿前
長野壹岐守 貞親

聞鐘声　安山隠岐守　貞澄
智恵長　大田江左衛門尉　喜就
離地獄　同　民部左衛門尉貞盛
願成佛　小工七十人
煩悩軽
菩提生
出火坑
度衆生

慶長五天龍輯庚子窮冬如意殊日
寄進

黒田甲斐守豊臣卿

南無千手千眼觀世音祝々

右精旨者
試聽五更樓上百千司法成就　本願宮司
職五十八代權大僧都　栄源敬白
奉行吉田左近貞延　大工大江
此鐘の銘を京條大宮司吉の延ゑ家しに
依て　長政公尚國の所仕のまゝ宮司栄原
自分の年号ちゝさきを刻彫せしなれば
其后の二字をもこゝろの通るべし

宗像郡

大嶋

沖ノ石山の下麓なる平地のなかなる小山四方を囲て風
なへなるゆへ畠の字とさへ唱へと云なる大嶋なる猟場
安倍氏の支孫近世まて家産にして樵薪の利を収
む永正のころ安倍伊豆守宗像大宮司と石和
なる宗像なり亡ひさもと云て嘉永郡
鷹野なる村に後の子孫なりて是を安倍和泉と云元
氏なる仕へなる鷹野と云なる屬す天正十二年七千余
騎を清水宗治おかて戦死す云ふ右馬なる助は是なる
前天正七年なる生れ宗の戦なる鬼木清兵衛といふ者と

戦と合なて戦死す其子六郎左も天正二年なる石雲
なる池の戦場なる死す其子孫後国柳
川なる住ひ後山国なりて　長政公の時なる子孫
なる成て福岡なる住ふなるもの安倍伊豆ハ大鳴なる住し
其子孫掃部と云ふ右又大宮司なる和なりて云ひ
子次郎なる文助なる長なりて後大鳴の神職となる
後なるハ其家衰微して神職と失ひ農人となりて其
子孫大宮なる仕ふ宗伊なる延宝なる時逝去ひ
なる云屋敷第宅なる鳴の三氏の支孫もなる大鳴なる
残なり沖ノ石山の東南方磯際なる石の上なる社なる里民
なる道祖神なる云安倍氏の祖なる安倍宗伊なる山鳴なる

流され給ひて後 黒田松崎明神と勧請しける社なりと云
所々今まで乃手にて此浦に鎮まる安曇氏の子孫を
先此浦やしろに年ありて後大嶋乃社に来住す此社
大嶋の末社にあらぬ故猶ましも近年大嶋の神職河
野氏是をまつれり

縫殿大明神

怒山村庄屋北一町代前の庄屋渡邊氏といふ縫殿
の西表をし時萎起てゆゑのうしろ宮より二丁程
南楠櫃の本にて縫殿ありて昔記世に傳へし事是を
堀出すへしと三夜まて告有しかは村民あまた是を
ほり出しこれ社に納る鐘の字

縫殿宮鐘銘　奉施入大日本國筑前州宗像
郡怒山縫殿宮鐘一口事右意趣者
天長地久御願圓滿　天下泰平　國土豊饒
社家繁昌　當村安穏　諸人快樂　殊者信心
息災延命　子孫繁昌　皆令滿足　施主如意吉祥
大宮司宗像朝臣氏俊大願主沙弥藤原道珎豊
前州今井庄東金屋大工藤原吉安
　永享十二天庚申三月七日敬白
鐘の寸法高サ二尺五寸周囲六尺三寸厚サ一寸五分程
恰好より重し多福山と號す又雲山とも号す寺なり
是宮なるよしもとも傳る禅宗本木村祥雲寺の

まちなり

早良郡

千賀浦

藻汐草大名高く筑前にすぐれ福岡の城
乃西名角村乃東南に乃ぞ千賀浦と云けれ入海乃
しと　長浜云城と築郡宮崎とうく水場とーまひし
ゆ後ち浦乃ちくしに或曰志賀崎とむーハ近の崎
ゝ云ーす古記ゝ云へゝ志賀浦と千賀浦と
ゆへきゝと以り千賀浦と千賀浦と
三代実録ゝ記筑前松浦の郡ゝ浦ゝ波ゝ浦ゝ崎ゝ

ゝ以りゝ玉の浦ゝも千賀浦ゝ以ゝゝや笑ゝ定
しかるを

後拾遺　千賀浦ゝ波ゝせからゝ地てひるまゝゝ玉ゝ一つゝ拾　道信
かひしやゝゝ千賀浦ゝ笑ゝて拾神ゝゝ近の浦波　師良
ゝ千賀浦ゝやゝ拾ゝ千賀ハ又いゝ玉ゝ浦ゝ成ゝゝ千賀
ゝ玉ゝ近の浦ゝ千賀の美おゝゝゝ玉つゝ人　家隆
嘆ゝゝの浦風ゝゝゝへゝ友ゝゝ千賀浦ゝ嘆ゝ月
都ゝ夢ゝ三ゝ友ゝ玉ハ桃ゝゝの浦風　雅経

仙道

内野村の松ゝ長平山の西南ゝ麓ゝ地ゝゝ

山下の高平屋敷を初め国郡東入部の
枝村三郷九ヶ　君の行館を定し宝文二年八月
光之公より是と立持ち給ふ紀州の来地なる
所にて後仙台に城池掘廻して彼三郷九村の
高館と云ふ移されて宝文四年光の本と切掘ひ
山とみして是と再さ翌年代長崎化成館に館
舎をかーるを所にして誘る事数千歩其下地と
平ら行池を堀く蓮木の樹を植並べ其中に家
ヶ家士の宅多く接くしろ山を前に川あり
ひろいさハ又峯密長くつらなりて雪月花ふ乃
なりめらへす山行宅芙化の後宝文六年七月十四
光之公より之を遊しまひ前門にて鱗魚成
ることを及ひいまハ山館に宿して翌日帰りまふ
三後延宝元年七月ヶ又　光之公来りしの此
ときに　綱政公を清浦しまふ又元禄二年四月三日
今の邦君　綱政公来りしの此
再遊しまふ

背振山境

凡諸列に於て国郡の境ひのとりて成る
ものにて山の最川海
谷就大道をの筋あり而とて境を
と定ひ何もの所も亦郡背振山の西乃須さ

紀伊國名浦郡玉垣川の上大船乃峯より恠石郡
高山の南丹糸山乃おくに名草山仮城山乃西郡鬼の
島に以る東西の山く皆峯の須れ上筋とうつて紀
伊飛騨境に仮城に脊振山の西に仮城山うつて
南小に横に以り峯筋西に東に つきまとる乃に
寒に川流もて脊振山も同く南小なれて東西
の峯つて西の方に酒垂山まて峯筋とうつく
国境に其形勢望めは筋ゆまに沿とを以て
横に南に泛て国境とすつへき利なして酒垂乃
西に南の方山に仮城に玉垣郡乃に
ある河とうつく境に芝岳筋ハ仮城の勢かりて

つ山に雖ゆく庫郡乃とうつて山のは後と境と
せるに乃山のは後と境とする事尚国九郡郡山の
紀伊境中京の豊前境合蜜に岩後境岩山に上と境と
せすして は後と用る事俗に庫郡乃に東ハ酒垂
山に東に なれる庫と境して三後に沿に二
主平の谷川とつて い蜜に本京の谷川とかのりく
脊振に東の峯に以る是脊振山乃南の境とわ
仮斯のあ一前に以る筋目に池て国とうつて事かく
のあくに沿に利に沿つへきなれい之昔筑前
脊振山に僧坊多に沿しも小の方ハ峻に山のかに
なれい寺院と立へき境地なし面に筑前の境内廣

さゆへ往時多くの寺院ありしと又元亀年中武田勝頼の軍と
戦る境論と相模方と云た出来たりし山谷門と云られて
西北と東と北と三への境と云あるに世脊振の社壇徽
を付脊振山の麓に社殿宅を造り別宅を造りて毎年参詣と云脊振山と称号と
宅とかくるひしく此時寺院已に退転し座主も貧窮
と及ひしに慶二年無と宅と寄て地と犯帝国西小河
内の民と与に宅元亀帝国板屋村の地なれと
社世乃時分もしに己と彼方と異とし往西小河内乃
境内と定り夫与りて彼書に地と出る板屋村
乃境内とす社世と出国と主なりして帝国の境

内と相と犯帝と雲与へしゆへと出付りして彼地犯帝
面と入しに帝の東東乃川筋と出て上り川筋と
くられて西北乃方相模と境として是と川
筋と隔て脊振山との分水是いまへの境とはあと
与りて相脊振山乃東れ岩と称て北乃
禁と乃東面小河内村の谷と云う西小河内と
東小河内の分と流て谷門と以て尚西乃境と東
小河内に龍帝王と称と属し西小河内に犯帝神河郡
と属す相又東小河内の川東と流まして那珂郡大
野村の内地蔵谷中の谷に犯帝境と流れる川
と一り為り夫与り南れ方川流まて板山と西

の境なるし東を能登と屬し大野と云村を西は能登
とし其又山河内と屬す西の方昔は民家の多き
後と民家を支脊振山の麓より小代方へ能登か
多くまとかの〻く能登と屬しなる事は細を脊振
山西方酒屋山と南とをもて能登と屬し〻もしは其
代りとて脊振の東と越前と屬をしく其西の方
むかのまてを能登と屬をしく其つゝへ國郡とわかち
し人筋目を池いなる山と詠て南は名池を又能
登能登と名屬し境と定る事指なとは以て物の
抑長短と等しくすなわち所しゆゑ境とかゝりてかく
乃めくらすんいなるへくすす

燈籠堂

慈照院と云放生堂れむしあるを永元二年創を也
しと云法中より取あけるる石仏の家を安置し又
三宝の図を重く釈尊の像と安置し上図を燈籠
とかく〻山堂〻〻への良工乃作と云 秀吉公此地を
逗留てゝ利休山堂れ茶と云寺とし細を家して
都を移しと云を学所法地を兼守る

うねを〻海の谷絶壁を峯
うねを〻山を登れ東小萩の尾乃南をあるを山と
峯を也し河内国伊勢山のかし去を所より京あハ山
のかをち義し云ほれ谷と云山あり是又高し云

あるホの小さ無聖寺をもて如意輪観音を山代の寺に入れる
所なるゆへと名付けしと云

梅岳寺

立花口村にありしかしめ立花山神宮寺といふ立花氏
雪の母印籍氏法名養孝院怒栄妙忠天正三丁亥歳
三月廿六日卒し曹洞禅宗法名和尚と信し開祖と
す其後地と山上に又てあらしめ梅嶽寺とまて立し
て養孝院のこゝに供養せんと欲すといへとも軍事
繁多にして年を経るにくく天正十三年乙酉九月十
一日道雪籠城の日本城陣中にて卒し其遺骸を
梅岳寺に葬る 梅岳院殿 道雪居士と号し

養孝院の墓に遷すこと道雪の嗣子左近将監
統虎父子志と遂に梅岳寺と山上に設め祀り後二
墓と移さんと欲して移さ事成果さ慶長年天
正十四七月薩摩に多勢出屋城とめさ立花城と
責む 秀吉公の西征と雪て退さ 秀吉公より
あいく九州に社と立つ統虎の所を改て柳川に
移さる故に梅岳寺と柳川に遷すとの祠堂
寺是より移さ其骨或墓の地の墓八基あるを
尚高名と称し養孝院道雪乃二基并位牌今
に供くに寺に有り道雪より寄附ある長刀馬
鞍を今日ホ医王寺に有り 鎗并鎌此寺に有り

元禄十年丁丑　細政公の夫人立花宗雪の尊孫と
道雪の新像とけちえ彩堂を造て是を所
る称して瞻希堂と号す先考如雪の祠系にあふ
五知如来の像とうつく堂代を写し秀元供
料代料として白銀五百匁を附し寛永二年又米
弐百俵とうけ給ふ　元禄の法式に加列たまふ乃
直来寺と号ける

怡土郡の内庫府郡村

吉井村　福井村（此村の内公領かしら福井浦と唱ふ）　鹿家村

右三ヶ村惣高三千四百八十石余　土井氏領之享保
二酉年　奥平大隅守殿　丹波亦宮内少輔殿　豊前

中津ゝ河郡内之公領の内廿二ヶ村高三万七千九
百石余奥平氏領地となる村

有田　藏持　飯原　河原
長野　川付　神有　武村
松国　漆戸　深江　深江町
大入　松末　一貫山　渡川
波呂　長石　清石　石峯
行峯　河原

松枝　公領と八ヶ村言る六千五百石余あり尚殖ル村

加布里　濱窪　田中　東村
本村　香力　月山　岩本（此村の内言る三ヶ八石余中津領

和年和泉守殿庫津領地の内新田五千石余宗家相続者之
文禄四年未 土居図防ち殿へ川役の附 三ヶ所と
成ル

筑前國續風土記華漏終